

2011 Expert Collection

3月号 通巻第318号



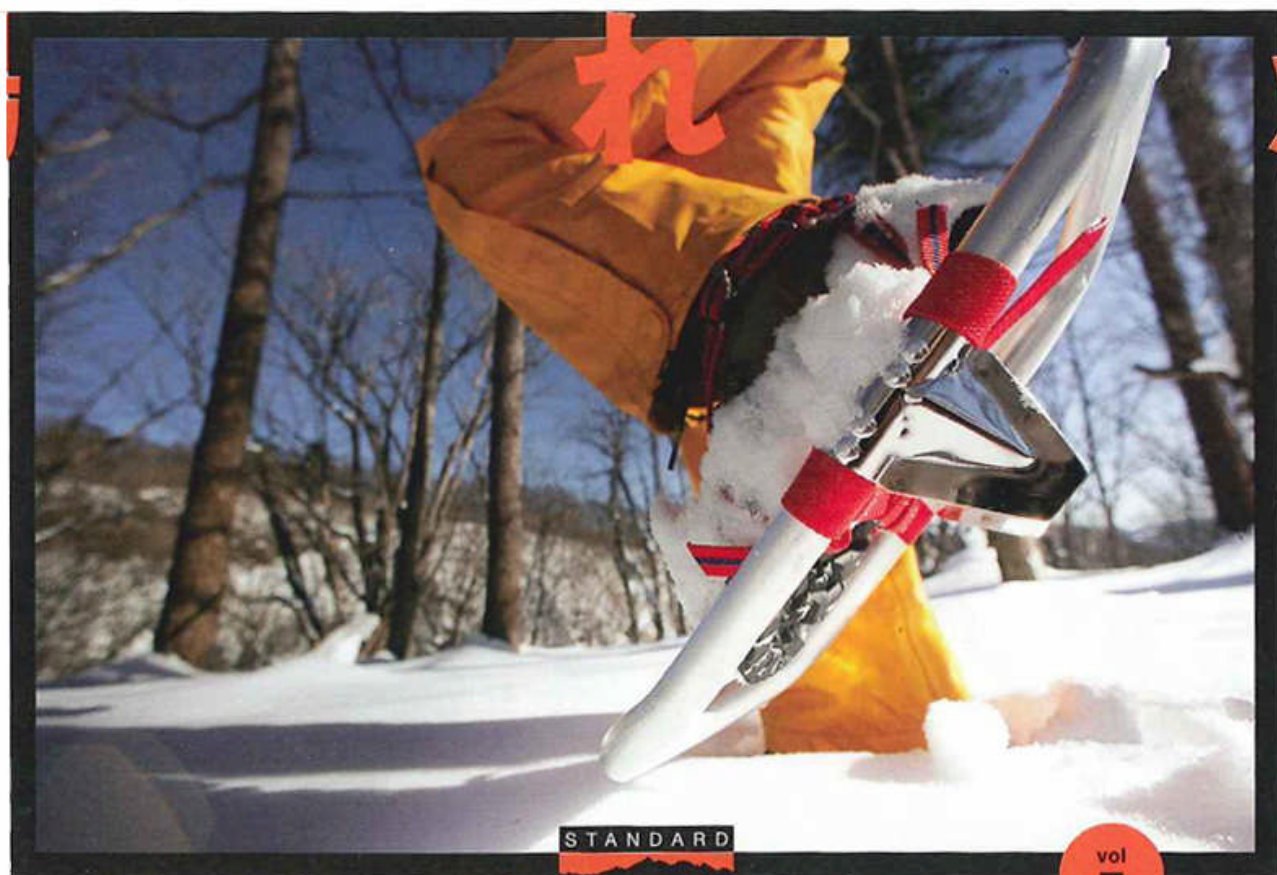
株式会社

エキスパート・オブ・ジャパン

我社の商品はすべて **Made in Japan** 表示をしています。

〒334-0062 埼玉県川口市榛松 699

TEL 048(281)1322 FAX 048(286)0866



スノーシューズ

月刊誌 PEAKS 2011年2月号 に掲載された我社商品

アイゼン爪角度の研究

登山用冰雪歩行器のアイゼンの爪角度は出歯型を例外として通常90度の角度で設計されている。その角度については確固たる論拠がある訳ではなく、習慣であったにすぎない。

しかし、人間が歩行するには腰を軸に後側の足を交互に前側に送る動作を繰り返して前進する。足はつまづかないように地面から浮かすが、直角に着地する人間は誰一人いない。

足を大地に直角に着地するとしたら、アイゼンの前と後の爪は90度にするべきだが、実際には斜め上から着地、前進を繰り返す。急斜面における下降にしても90度の爪角度は理論に反する。

しかし、爪角度を大きくしすぎると、アイゼンの強度が保てず、破損する原因につながる。さらに品質の悪い鋼材を使ってもトラブルを生じるのは必定になる。

それらを考慮して信頼できる鋼材クロムモリブデン鋼を使用。前と後の爪角度を100度と定めて発明特許の申請をする。これらはフィールドテストでも立証済である。

特許願は平成22年10月19日に特許庁へ申請、受理されている。

株式会社エキスパート・オブ・ジャパン

アイゼン爪角度の発明特許 特願2010-23

- 冰雪上での行動を詳しく分析するとアイゼンの前後の爪角度は100度にするべきとの結論に達する。この発明によりアイゼンの爪が無理なく冰雪をとらえ、安全歩行、急斜面の登下降にも効果があり、疲労の減少、滑落防止にも役立つアイゼンが設計できる。ただし、鋼材はクロムモリブデン鋼を使用する。
- 爪角度の発明に適用するアイゼンは爪高30mm以上あるものとする。爪角度の発明に関する商品は出荷が始まりしだい本誌にて逐次報告します。
- フィールドテストの概要は本誌通巻307号 続々徒然の山 第94章谷川連峰、白毛門の項 深雪のフィールドテストに記載。

(今年の日本列島は積雪量が例年に比べて多い影響で我社はスノーシューズの生産にてんやわんやです。おかげさまでアイゼンも品薄気味です。)

スノーラケット黒竜 完売のお知らせ

H23年1月末に完売いたしました。
カタログより削除させていただきます。
ありがとうございました。



アイゼン破損原因のレポート

H 2 3 . 1 . 8 記

1. 劣悪な素材で作ると成分不均一で不良品が発生する。折れ曲げの原因になります。
2. 設計不良、焼入不良。これはメーカー責任です。
3. 爪が岩の割れ目に入った状態で負荷をかけると「てこの力」がはたらき、想定外の応力が加わる。意外と多いトラブルです。
4. アイゼンと靴の装着が緩んだ際も大きな負荷がかかる。美錠の緩み止めをしないのは常識外です。

(記事) 1~2 項の場合は 1 回の生産数が多量なため頻繁にトラブルが発生する可能性があります。

3~4 項の場合はまれに発生するトラブルでユーザーの自己責任です。修理は有料です。

アイゼンは酷使すると傷む消耗品と考えていただきますようお願いいたします。

使用後は、泥まみれにして放置ユーザーも論外です。すべての装備は使用後に手入れをするのが登山者の常識です。

登山装備を大切にすれば、万が一の時にも、必ずや、あなたを守ってきましょう。

やまのかたりべ まぜとうげ ふどうやま 第 1 章 間瀬峠と不動山

2009年9月に外秩父の榎峠から陣見山(531m)を歩いている。(本誌通巻第303号参照)その西側に連なる雨乞山、間瀬峠、不動山は登り残した山々といえる。のちに後悔しないよう、今回は間瀬峠から雨乞山を往復のち、不動山を目指す計画をたてる。

雨乞山 あまごい 間瀬峠東に隣接する標高510m峰。山頂にパラグライダー発進場がある。地図上にはハイキングコースが記されているが、今回は登山道が分からず断念する。

間瀬峠 まぜとうげ ひぐち 秩父線樋口駅北西に位置する雨乞山と不動山の最低コル。標高378m。R287が峠越えをして長瀨町と本庄市に通じている。

本庄市役所 0495(25)1111。

不動山 ふどうやま 埼玉県北西部の外秩父の間瀬峠東側の山。標高549.2m。間瀬峠のすぐ北側に登山口があるものの、標識がみすぼらしくて見つけにくい。登山道も不明確。どちらかというマニアック向き。

おちこちの山

2010年12月26日 快晴

日本列島に冬将軍が来襲した寒い朝、恵比寿を出発。池袋駅、小川町駅經由寄居駅で秩父線に乗り換え樋口駅へ向かう。

冬になるとハイカーは極端に減少する。秩父線の車中にも登山者はほとんどいない。樋口駅で下車した乗客はたった一人きり。間瀬峠まで1時間あまり要する車道歩きを省略するために、予約したタクシーに乗り込む。

秩父観光タクシー 0494(66)0116。

思いのほか、早くついた間瀬峠ではタクシーに乗ったまま、登山口捜しに迷走する。峠には間瀬峠を示す案内すらない。峠はもちろん、その手前にも、逆側にも登山道らしき入口が見つからない。雨乞山方向と不動山方向に林道分岐はあるが道標はついてない。雨乞山側の車道をしばらく走行するが、どうも違う。峠に引き返してタクシーを降りる。タクシードライバーは申し分けなさそうに詫言

る。

タクシーを見送り後も登山口を求めて歩き廻る。峠近くの北側右方に幅広道が分岐する。クサリに閉ざされた入口左には夷申塔と馬頭明王の石碑が奉られ、「R140へ60分、左折8分でひぐち駅」の道標がある。だが、雨乞山の案内はない。試しにその道を歩くが、下る一方なので、ここも違いと判断する。雨乞山登山は諦めるしかなかった。

つぎに不動山への登山道探しに右往左往する。峠の南側から改めて探索するうちに峠から北側に2分下った山側に小さな登山口標識を見つける。登山道もやたらと狭い。これでは見落とすはずだと苦笑する。登山口探しのタイムロス35分以上。

霜柱が立つ急斜面にはフィックスロープが張られている。開けた稜上でててからは、日当たりのよい緩斜の尾根歩きがしばらくつづく。雑木林中の前衛峰を越えてコルへ下る。その約100m下方に林道が見下ろせる。登り返して山頂を目指す。

しはずには
まぜのとうげで
まよいみち
あまごい いかず
ふとう めざすや



通る人がまれな登山道は荒廃する。ほとんど稜上に直線状につけられた道はところどころで掻き消える。

小峰手前でロープが張られたかなりの急坂を登りつめる。ヒノキ林に囲まれた小広場が不動山山頂。山頂標識はないが、三等三角点が設けられ、逆側、間瀬峠。直進側、苔不動と書かれた木片を確認する。山頂展望は得られず。

登ったコースをたどり間瀬峠にもどる途中で雨乞山上空に飛ぶパラグライダーを見仰ぐ。4機が天高くフワフワ漂う。峠についたら携帯電話でタクシーを呼ぶ。

「樋口駅から間瀬峠まで運んでもらった石井です。間瀬峠から樋口に向かって車道を歩いていきます。迎えに来てください」

12分後、峠から800m下った車道上で、登ってきたタクシーに手を振って合図する。

樋口駅から寄居、小川町駅経由で東松山駅で途中下車。客待ちのタクシーに乗る。

玉川温泉保養所紀聞

下山後はできれば温泉に入り、綺麗になって家に帰りたい。入山前には立ち寄る温泉施設の有無、当日営業しているか、最寄りの駅等の調査も入念に行う。

玉川温泉も例外ではない。埼玉県比企郡玉川村大字玉川字寒風3700。0493(65)4977。

問い合わせると最寄り駅は東松山駅だと、丁寧に教えてくれる。

東松山駅で乗ったタクシーの乗車時間があまりにも長い。不信を感じて運転手に尋ねる。

「東武東上線沿線では小川町駅が最も近く、車で10分です。武蔵嵐山駅から15分。東松山駅からは30分ほどかかります」

2階建ての玉川温泉前に到着して落胆する。建物が小さすぎて民家のようにしか見えない。はたしてここが温泉施設なのか、首をかしげながらドアを開ける。入館して先ずは山靴を脱ぎ、入浴手続きをすませる。

狭い館内は人またでごった返している。フロント係に間違いアクセスの件を訴える。ところがトラブルを処理するシステムができてない。従業員も不慣れなおばさんたちがおろおろするばかりでらちがあかない。

———以下は玉川温泉のホームページより転載 ———

車利用のアクセスは関越自動車道東松山ICより小川町方向へ、R254嵐山バイパス経由・玉川方向へ13km。東武東上線小川町駅からはタクシーで約10分。

緑に囲まれ、6月から7月にかけてはたくさんの蛍が幻想的に舞う。(中略)地下1700mの秩父古生層から湧出する温泉は、(温泉名)玉川スプリングス温泉。(泉質)アルカリ性単純温泉<低張性・アルカリ性低温泉>。(泉温)25.7℃。(効用)神経痛、筋肉痛、運動麻痺、関節のこわばり、打ち身、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え症、病後回復期、健康増進、(性状)無色、澄明、無臭。PH9.7。加温、消毒はする。掛け流し式か循環ろ過式かは不明。湯は肌にやさしいが、微^{ぬる}温い。

帰りは施設の好意で武蔵嵐山駅まで送ってもらう。しかし、自分たちの非を認めようとはしない。私だって釈然としない。わだかまりがとけず気分を害して家路につく。

2010年12月／単独行

《タイム》

池袋駅	7:39
(東武東上線急行小川町駅行き小川町乗換え)	
寄居駅(秩父線)	9:06~9:22
樋口駅(タクシー)	9:32~9:37
間瀬峠	9:55~10:30
前衛峰	11:05~11:15
不動山	11:33~11:50
間瀬峠	12:20~12:35
峠から800m下った車道 (タクシー)	12:47
樋口駅(寄居、小川町経由)	12:55~13:14
東松山駅(タクシー)	14:21~14:25
玉川温泉保養所(車)	14:45~15:35
武蔵嵐山駅 (JR経由)	15:50~16:05
川口駅	17:50~17:55
帰社	18:33



大晦日の旅物語

12月31日 東京は快晴

蕎麦よりも、うどんのほうが好物といえる。蕎麦にはこだわりがない。だが長野駅前で食べた蕎麦が絶品だったと記憶している。

大晦日をワイフとすごすようになって食通に有名な麻布の「更科」で年越蕎麦を食べる習慣がついた。

今年は港区麻布3丁目11番に店をかまえる創業200年以上の更科堀井に訪れる。(12:30~13:45)100人以上の客が店前に並ぶ列に加わる。寒空の下、約1時間待ってようやく天麩羅蕎麦にありつく。店内にも順番待ちの客があふれ、てんやわんやの大賑わい。蕎麦を味わう間もなくあわただしく食らい席を立つ。店をでて六本木ヒルズに向かう途中では目眩をおこす。

六本木ヒルズの映画館で洋画「ロビンフット」をプレミアムシートで観賞する。(15:35~18:05)血わき肉おどるなかなかのアクション名作で感動する。

明日、2011年1月1日 元旦は二人で豊川稲荷に初詣でをする予定だった。大晦日の夜に夫婦喧嘩をしたため、私は一人で川口に帰社する。ワイフは一人でも初詣をすると言っていたが、定かではない。

1 爪の高さは49mm (ML)



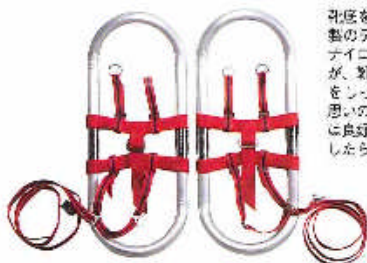
爪の高さに雪面をホールドするように49mmとされている。Sサイズだけは18mmに見えら

2 前後の反りがポイント



雪面を歩くときには、アルミパイプが弾力を生み、前後の反りによってつま先やカかとが引っかかるように歩きやすくなるよう設計されている

3 固定バンドは交換もできる



強度を支えるのは樹脂製のデッキではなく、ナイロン製のベルトだが、靴との固定ベルトをしっかりと締めれば、思いのほかホールド力に良好。ベルトが摩耗したら交換もできる

4 爪はステンレス製



石井さんが他のアルミ製カングキを履いたときにここが駄目だと重苦しい作りだったらしい。石井さんのものはステンレス製で頑丈だ

5 メーカーネーム入り



少し見にくいですが、ステンレスプレートにメーカー名が入る。アルミパイプがここで接続されるため、4本のリベットで留められている

定番の条件

スノーシューズ

価格：¥7,350 (S) / ¥9,240 (M) / ¥9,555 (L)

サイズ：360×182mm / 590g (S)

410×182mm / 735g (M)

441×182mm / 745g (L)

直径22mm、厚さ1mmのアルミをフレームに使ったスノーシューズ。センターの爪の部分はステンレス製なので、錆びず、悪寒にも強い。ベルトの取り付けも簡単で、どんな靴にも対応してくれる。まさに雪国の必需品。

6 かかともしっかりホールド



かかと部分は三方向に締める合金の形状が靴型で、きちんとホールドされる。ヒチナリでも簡単に装着できる優れたベルトシステムである

7 ベルトでソールを支える

ソールもナイロンベルトで支える形だが、思いのほか安定性が高い。靴と一体化させてしまえば、雪上も快適に歩くことができる



8 ベルトで簡単に装着



スノーシューの装着はベルトで簡単に、ベルト通しの端が2本あるため、簡単にベルトを通して装着できるシステムだ

あれを最初に作ったのは私です。というの、仲間が普通のハーケンを使って、すぐに抜けてしまつて大ケガしたことがあったんです。それで抜けないハーケンを、ということで作りました」

それまで医療機器のパーツという、精密さが要求される仕事をきちんとこなしてきた石井さんの工場の技術は非常に高い。それを持ってすれば、思い通りの山道具をつくることは石井さんにとって難しいことではなかったのだ。ニーズはいっしょに山に行く仲間との会話から自然とみ取ることができた。エキスパート・オブ・ジャパンの代表的な商品となっているアイゼンはそのようになって



EXP. JAPAN代表 石井勇典さん
三代熱く地金、プレス成型加工工場だ。ヤの技術を生かして、手づくりの靴も自分で手がける職人肌

あれが最初作ったのは私です。というの、仲間が普通のハーケンをを使って、すぐに抜けてしまつて大ケガしたことがあったんです。それで抜けないハーケンを、ということで作りました」

それまで医療機器のパーツという、精密さが要求される仕事をきちんとこなしてきた石井さんの工場の技術は非常に高い。それを持ってすれば、思い通りの山道具をつくることは石井さんにとって難しいことではなかったのだ。ニーズはいっしょに山に行く仲間との会話から自然とみ取ることができた。エキスパート・オブ・ジャパンの代表的な商品となっているアイゼンはそのようになって

定番が

どんな趣味の世界にもカテゴリーごとに道具がある。それはたいいてい玉石混淆、カオスの世界だ。山旅も例外ではない。たとえば靴。革、ゴアテックス、人工皮革、ナイロンと素材も形もさまざま。ジャケットやパンツ、キャンプ用具のひとつひとつにもそれは当てはまる。

れ、流行に左右されない不動の地位を手に入れる。このベージは、そんな定番製作の現場を取材し、背後に隠された哲学や開発者、制作者の熱意をお伝えしようと思う。

下請けから転換。 山道具生産を専業に

長く続く不況と円高によって工業製品の生産拠点が次々と人件費の安いアジア諸国に流出する昨今。東京大田区や、東大阪市などの町工場街はどこも青息吐息だと報じられている。今回取材にうかがったエキスパート・オブ・ジャパンもそんな町工場が密集する埼玉県川口市にあるが、代表である石井貞男さんは泰然自若として動じる様子がない。

「うちはずっと金属加工業を営んでいて、私で三代目。最初は航空機の部品を作って、その次は国内大手メーカーの下請けとして医療器具のパ

ーツを作っていました。ところが私の代でオイルショックがあつて、下請けという状況が先細りだということに気づいたんです。私は小学生のころから山に行っていて、それはずっと趣味として続けていました。そんな中、工場の工作機械を使ってピッケルやハーケンといった山の道具を作ったりしていたんです。すると山の仲間でシヨップの店員だった人から「これなら売れるから、うちの店に持つてこい」なんて言われて。そうこうするうちに、予想通り下請け仕事が減ってきて、それとは逆に山道具のアイテムが増えていった。「それならこつちを本業にするか」と山道具一本で工場を運営することにしたわけです」

石井さんが最初に作った山道具は？ と聞いてみると、ハーケンという答えが返ってきた。

「ウェーブハーケンといって、波をうったような形状をしてるんですが、

生まれる現場

しかし、時を置いて人々から愛用され続けるものもある。やがてそれらは定番と呼ば